

「子どもの遊び」を

理解するとはどのようなことか

小川 清実

はじめに

保育者が「子どもの遊び」を重要視しなければならぬことは、今や、常識となつていえるかも知れない。しかしながら、同時に「子どもの遊び」を保育者がどのように理解していくのかの困難さが浮き出してくれている。保育者が「子どもの遊び」をどのよう

に理解し、関わり、援助したり、指導したりすればいいのかなどが、簡単ではないからである。

私は「子どもの遊び」を重視するためには、「子どもの遊び」そのものを理解することが重要だと考える。そのためには「子どもの遊び」の姿である、事例を分析し、子どもがなぜ遊んでいるのか、遊ぶ楽しさは何かなどを解釈することが必要であると考える。そ

れが、子どもの心の内面に迫ることができると手立てになると思う。

事例をどう採るか？

私は今年に開催された日本保育学会において、私が観察して記録した子どもの遊び（「ウワー、目がまわる」）を事例として掲げ、分析したものを発表（注1）したのだが、発表後、フロアから分析対象とする事例をどのように選択するのかという質問を受けた。私はこの質問に意外性を感じた。なぜなら私は、私が直接観察したり、関わったりした子どもの事例はすべて分析対象としているからである。

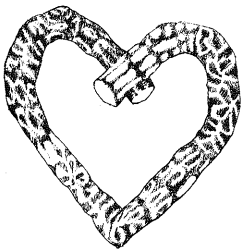
事例をいつ分析できるかという点、時期はいろいろで、すぐにできることもあれば、すぐにはわからないのだが、何年も経て、分析できることもある。子どもの保育を担当する保育者という立場ではないので可能なことなのかもしれない。「どうして、この子どもた

ちはこの遊びをこんな熱心に、あるいは夢中に、やっていたのだろうか」と考え続けていると、分析できる時がやってくるというのが本当のところのようだ。

事例をどのように分析することが重要か？

保育者は子どもたちが活動していることに細心の関心をもって、観察をし、関わったりして、記録し、分析するという一連の行動を繰り返すことで子どもの理解を深めていくことができる。

例えば津守真は詳細に事例分析を行なっている。彼の著書の中でも『保育の体験と思索』には多くの子どもの事例が報告され、分析を加えている。例えば四歳から幼稚園に入園したIという子どもの記録が、四月十八日、四月二十六日、六月十四日とあり、それらを分析し、Iと



いう子どもを理解していく過程が述べられている。

四月十八日のIは、字を書いてみせたのだが、これに対して津守は「子どもは、私が感心して見ることを期待していたようだが、私にはそのことを取り上げてほめる気持ちはない。ここにかかれた字は四歳のクラスに入園したばかりの子どもが、自分自身の内部から作り出そうとしてできた形ではないことはただちに見てとれるからである」(注2)と述べている。津守は、Iの隣でわざわざ紙にぐしゃぐしゃに書いて見せる。このように行動したのは、自分自身の内面を表現できないIという子どもの内面を揺さぶりたかったのだということがわかる。そして八日後の四月二十六日には、Iはきちんとした三角形の中に「山」という字を書き、その後、その頂点から赤い線を噴出させて「火山」といった。このIの行動に対して、津守はIが「形にだけはまっていることができないで、形を破ろうとするIの内的エネルギーのあらわれであろうか。

あるいは、I自身の本来的な性質の表現であろうか。

(中略)早くも、形を破って内部から新たな活動が出てくるときも近いのではないかと感じられる」(注3)と述べている。津守は言及していないが、私はIが、四月十八日の記録ではアルファベットや東や西とかの漢字を書いていたのが、四月二十六日には漢字ではあるが、山という字を、山をイメージしやすい三角形の紙の中に書いたことが興味深い。だからこそ、赤く塗り、火山のイメージへとたやすく変化していったのではないかと思う。それから一か月半後の六月十四日には、Iにとって、劇的と思える活動をした。それは砂の山の上から水をざあざあと、だれよりも多くかけたのであった。このIの活動を津守は「子ども自身がやらずにはいられない、こうした内面からの行為に接するとき、それは無意味な行動ではなく、意味をもったものであると思う。子どもにとつても、これはおとなから要求された行為ではなく、子ども自身の体験の意

味の把握と、そこにふくまれる問題の解決を目指した行為となっていると私は考える」(注4)と述べ、Iの行為の意味を探っている。

津守はここに、たった三日間の記録しか紹介していないが、おそらくIのことは気掛かりなので、保育現場を訪れた際にはいつもIを見たことだろう。そしてIと関わり、保育が終わった後で、記録する。記録の一つひとつを別々に見たときにはわからなかったことが、二か月、三か月と記録を継続していくことから、Iという子どもの内面を理解することが可能となる。砂の山の上から水をざざあとかけたIが、その後どのような変化をしていったのかを知ることができないが、記録からは確実にIが外側から形作られた行為を、内面からのものに変えていったことが読み取ることがができる。津守はこのIの記録からの考察の終わりに次のように結んでいる。

「人間の精神の中に形ができてくるときには、精神の

張りを伴った動きがある。子どもの遊びというのは、大体がこうした精神の動きの状態をいうのであると思う。形はその中に点在してあらわれてくるものであって、多くの部分が無形の動きである。だから制作品でも、絵でも、ごっこ遊びでも、形としてできたものは、その無形の動きの部分と合わせて見ないと、その意味をとらえることができない。保育はいつでも、形の生まれいずる以前の、子どもの精神や生活を相手にしており、形を生み出す苦悩を子どもとともにしているので、精神的にもたいへんなのだと思う。しかも、形が出てくるときには、もはや保育者の手を離れており、子どもは自分ひとりで作ったかのような、成就感と自信をもって、外に出ていくのである。」(注5)

子どもの行動を記録し、分析していくことは、まだ形にならない子どもの精神を理解していく努力であり、子どもが成就感と自信をもっていった時に、子どもの成長を確認する。そして子どもの成長を通して保

育者自身の成長をも確認することができる。

また子どもを経験や活動の記録をし、分析をし、考察をするという一連の作業の中で、本田和子は「経験や活動」について次のように述べている。

「具体的な実践は、幼児と保育者の毎日の活動、という形で著われる。保育の実体とは、彼らが、人と世界に向けて働きかけ働き返す活動の総体なのである。ところで人と世界に向けて働きかけ働き返すとは、大きな表現と見えるかもしれない。たしかに、幼稚園や保育園で展開される活動は、それほど大げさでも、目を見るほど新奇なものでもない。幼児と保育者のみごとに共働が実って、思いがけず漸新で独創的な活動がくり広げられることも稀ではないが、むしろその多くは、きわめてあたりまえの日常的な生活行為であり遊びである。たとえば、ひとりで部屋に入ってくる、好きな玩具で遊ぶ、あるいはそれをかたづけ、友人と協力したりけんかしたりする、食事をする、など……。

しかし一つ一つをとり出してみれば何ほどのこともない日常的な活動の数々が、毎日変わることなくくりかえされるところに、重要な意義の一つが潜んでいる。さらにそれらあたりまえの活動が、幼児と保育者という活動主体によって、突然、意味深く充電されることがある。その時、この平凡で日常的な活動が、格別の価値を帯びてかけがえないものとなるのである。」(注6)

そして保育活動を外側から眺めていくときに、幼児と保育者が「何をしているか」のその「何か」に向けられやすく、一種の「もの」のようにとらえていくことがあることを指摘したうえで、それは違うとして、次のように述べている。

「子どもが知らねばならないのは、ともにいる幼児と、保育者である『私』に『何が起こっているのか』、『これらの行為を通じて、どのような経験の深まりがあるか』ということなのである。」(注7)

本田のこの指摘は重要である。普通、保育者は子どもたちが活動しているときには記録を書けない。保育者はただ見て、感じたり、どのように関わるか、考えたりしている。

保育者ばかりではなく保育の観察者も、子どもが「何をしているか」だけに関心を寄せて記録したのでは、本来の記録の意味はないことになる。観察者も、幼児と保育者に「何が起きているのか」「これらの行為を通じて、どのような経験の深まりがあるか」ということを意識して観察し、記録する必要があるのである。このような記録による事例の分析は、子どもの活動の分析になる。すなわち子どもが楽しんでいる、あるいはそれをやらすにはいられない理由を考察することが可能になるのである。子どもの主体的な活動は、子ども自身を示してくれる大切な手掛かりとなる。

(埼玉純真女子短期大学)

注

1 「子どもの遊び理解―事例をどう分析することが重要か?―」日本保育学会第五十四回大会 二〇〇一年五月二十六日 尚綱女学院短期大学

16日 尚綱女学院短期大学

2 津守 真著『保育の体験と思索』大日本図書 昭和五

五年十二月 一一〇頁

3 同書一〇九頁

4 同書一二二頁

5 同書一一三頁

6 岡田正章、本田和子編著『保育における経験や活動』

第一法規 昭和五十三年四月 六頁

7 同書七頁

